

安全な登山を Safety Mountaineering

ビーコンをしていないと…

ブローブラインによる捜索では、捜索員20人を用いても100m×100mの範囲の粗い捜索をするのに4時間、3点ブローブでは20時間も掛かる調査報告があります。2013年は日本製のビーコンが発売になってから20年目にあたります。写真は、ビーコン非装着の登山者を探す長野県警の隊員。



雪崩死亡事故を考える

本格的な冬山シーズンを迎え、いろいろな山行計画を立てている方も多いと思います。冬季山岳の危険である雪崩を、皆さまにお考えいただくヒントとして雪崩死亡事故のデータを整理しました。

年平均5件9人 8割がレクリエーション

過去23年間で124件の雪崩死亡事故が発生し、201人が亡くなっています。年平均5件の死亡事故が起こり、9人が亡くなることになります。死者数の増減は、そのシーズンの特徴に依存しており、著しい暖冬少雪の年に死者数が大きく減少する以外、明快な傾向はありません。最大の死者数19人を出した2006シーズンは「平成18年豪雪」の年です。しかし、その豪雪で死者が増えたのではなく、寒気を伴った春の低気圧がもたらした雪崩サイクルと週末の晴れが重なったことで、4月8日~9日の2日間で10名の死者を出したことが影響しています。→図1

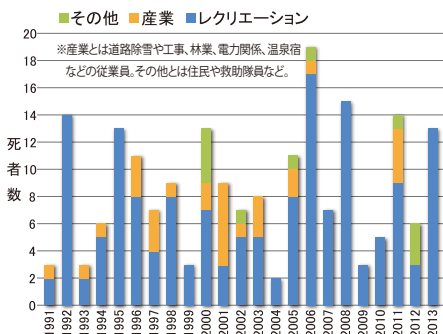


図1: 雪崩死者数の推移 (1991-2013)

94%が山岳での事故 登山者が死者の半数を占める

レクリエーションの雪崩死亡事故の94%が山岳で発生しており、死者の半数を登山者が占めています。これは日本の特徴であり、ヨーロッパであれば死者の8割がスキーヤー、米国であれば4割がスノーモービルです。また、近年、滑走系の死者が増えているという明快な傾向はありません。あくまで、そのシーズン毎によって特徴が変わります。→図2

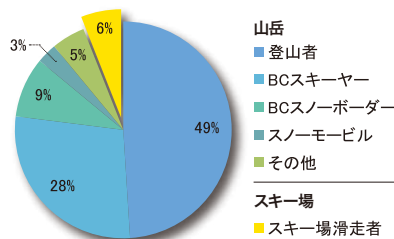


図2: レクリエーションにおける活動別の雪崩死者の割合 (1991-2013)

山岳での死者の87%が男性 30代が34%を占める

山岳における雪崩死者の87%が男性、13%が女性です。死者の平均年齢は40歳ですが、年齢区別の構成をみると30代が最も多く、全体の34%を占め

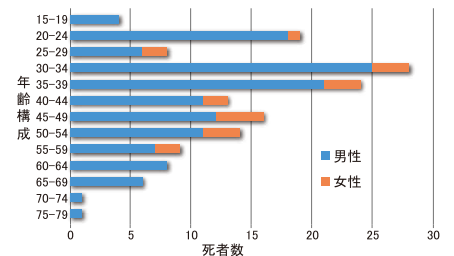


図3: 山岳における雪崩死者の年齢構成 (1991-2013)

ます。最年少は18歳、最年長は76歳です。また、20-24歳の区分において12名が大学生です。→図3

山岳での雪崩死亡事故の7割強で 複数人が雪崩に巻き込まれている

山岳での雪崩死亡事故においては、一つの雪崩に同時に複数の方が巻き込まれるケースが7割強を占めます。一般的に、複数の方が雪崩に巻き込まれる事故は、雪崩地形とグループマネジメントの整合に教訓を残すことが多いものです。→図4

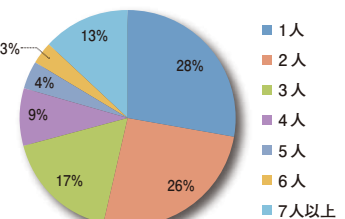


図4: 山岳での雪崩死亡事故における雪崩遭遇人数の割合 (1991-2013)